

スベトラーナ・アレクシエーヴィチ

『最後の証人たち』論

— 「見る」ことから「語る」ことへ—

安元隆子

Takako YASUMOTO. A study on “Last Witnesses” by Svetlana Alexievich. *Studies in International Relations* Vol.38, No.2. February 2018. pp.19-27.

The second written work by Svetlana Alexievich is “Last witnesses”. This is a testimonies collection of the war between Germany and Soviet Union like the first written work “War’s un womanly face”. But the second work gathers the voices of children. It is a war reflected in the eyes of children and it does not talk about their wartime experience after the war finished. The state of severe war is told by the image of black. Nazi German soldiers wore black uniforms. At first the children loss their childhood was emphasized, but these parts were omitted in further publications. Some parts of testimonies were also changed. She only wanted to express the war through the eyes of children. At first she thought they were silent witnesses. But in the end she recognized them as people who could speak out and were able to give voice to their many experiences.

【はじめに】

周知のように、スベトラーナ・アレクシエーヴィチの方法の特色は、「小さき人々」の多くの証言を集めて歴史を物語る多声的な叙述にある¹。そこに、いわゆる「主人公」の登場や「ストーリー」はないが、様々な声が重なり合い、響き合う。本論で取り上げる『最後の証人たち』（1985年）もその方法を用いていて、雑誌*Октябрь*（1985 No. 3）に発表した後²、『戦争は女の顔をしていない』に続く二冊目の単行本として刊行された³。『戦争は女の顔をしていない』⁴は、第二次世界大戦の独ソ戦に参加した女性兵士たちの証言集であったが⁵、『最後の証人たち』は、独ソ戦当時3歳から12歳までの少女少女たちの証言を集めたものである。元女性兵士というこれまで表立って取り上げられることのなかった女たちの目から見た戦争と、幼い目を通して見た戦争。同じ独ソ戦を巡る証言であるが、その様相は明らかに異なるはずだ。本論では子どもたちの目を通して見た戦争を明らかにしたいと思う。また、単行本では、副題の変更、初出の序文の大幅な削除と簡略化、証言内容の入

れ替えや書き足しを含む改訂がなされている。その跡を検証すると、これらの証言をまとめたスベトラーナ・アレクシエーヴィチの意識の変遷を読み取ることができる。本論では初出と、2013年に刊行されたスベトラーナ・アレクシエーヴィチ著作集に収められた『最後の証人たち』⁶を比較し、この点について考察を試みたい。

なお、日本では三浦みどり氏が原著を翻訳しているが⁷、三浦氏は初出を基に訳出し、さらに著者の了解を得て配列を変え、証言をグループ化し、章立てをしている。その章立てを追えば、「一九四一年六月二十二日」「ドイツ軍の下で」「疎開の日々」「孤児たち」「少年兵」「ただ記憶の中で」「戦争が終わって」の順である。ほぼ、時間の経過を追って証言が並べられていることがわかる。これは日本の読者の理解度を増すために三浦氏が試みた方法であったが、アレクシエーヴィチの多声的な叙述を整理して時間軸に沿った物語として再現することは、翻訳の段階で新たなバージョンを創出したことになる。タイトルについても、原題は直訳すれば「最後の証人たち」となるが、三浦氏は爆撃の様子を頭にかぶったオーバーのボタン穴から見

ていた少女の証言から『ボタン穴から見た戦争』としている。タイトルの変更は読者のイメージにも大きな影響を与える。本論では、この翻訳段階でのタイトルの変更についても考察していく。

尚、テキストは初出の *Октябрь* (1985 №.3) Издательство Правда. と、著作集の Светлана Алексиевич. *Последние свидетели. Соло для детского голоса*. Время. Москва. (2013) を用い、引用箇所日本語訳は論者自身の訳である。

【I】「子供たちの話ではない本」から「子供の声のための独唱曲」へ

初出では、著者の序文がついている。そこで著者は、戦争で亡くなった数え切れないほどの子どもたちの死を悼むと同時に、戦争の惨禍を経験して生き延びた子どもたちに想いを馳せている。彼らはどんなに幼くとも、記憶し、それを語るという。父のこと、母のこと、飢餓や恐怖、学校を恋しく思う気持ち、逸る前線への想い…彼らの語った記憶を綴ったのがこの『最後の証人たち』である。そして、焼き尽くされ、一斉射撃を受け、爆弾や弾丸、飢餓、恐怖、孤児になることによって殺されて（失われて）しまった子ども時代がこの本の主人公だとも語っている。著者は序文の最後で、今後、子ども時代が戦争だったと決して呼ぶことがないようにするために、私たちは何をなすべきかを問うている。

このように、スベトラーナ・アレクシエーヴィチは初め彼らの証言を通して「失われた子ども時代」を描こうとしたのだと思われる。つまり、子どもらしい遊びや子どもらしい感覚を味わうことなく戦争の真中に放り込まれた彼らの姿を。

例えば、ゾーヤ・ワシーリエワ、12歳（1941年当時の年齢、以下同じ）の証言に「今、大人になって、年月を経てもみると、私たちはなんて子供たちだったのだろうと驚きます。もしかしたら、子どもではなかったのかもしれない。」⁸という一文がある。こうした想いは初出の他の部分にも描かれている。ミハイル・マイヨーロフ、5歳の証言の冒頭「後になってわかったことは、私が無傷の生活を送れたのは戦争までだった。戦争までが私の

子ども時代だったのだ…。」⁹という部分や、ワリーヤ・ユルケヴィチ、7歳の「これらすべてを体験した後で、これらすべてを見たあとで、子どもでいられますか？わたしはすべて大人の目で見ました。私は同い年の子どもよりも年取っていました。」¹⁰の部分など。

しかし、グリーシャ・トレチャコフ、13歳の「僕たちが子ども？」という極めて象徴的なタイトルの付いた証言¹¹は、大人同様に働き、15歳の時には一人前の男だと信じていた少年の言葉を綴っているが、この証言全部は2013年版の著作集では削除されてしまった。また、エフィム・フリドリヤンド、9歳の「子どもの自分を私は覚えていない。戦争が始まって、子どものわがままは終わってしまった。私は戦争についてはすべて覚えている。—これは子供の思い出ではない。わたしは大人だと感じていた。殺されることを大人の感覚で恐れ、死ぬということを理解し、大人の仕事をし、大人のように考えた。そして、あのような状況の中で、私たちのことを誰も子供の様に扱わなかった。」¹²の部分は、2013年度版では「子ども時代は終わった。最初の射撃と共に。私はまだ子供だったが、すでに横には誰か別の人が…」¹³と子ども時代の終わりを記してはいるものの、初出にあるような大人の感覚を持たざるをえなかった子どもの詳細な描写は捨象されている。また、ヴォロージャ・マレイ、13歳の証言の、初出の末尾は「私はすぐ大人になった。私たちの村で地下組織がつくられた時は、すぐにメンバーに加えてくれた。」¹⁴であるが、この証言もまた、2013年度版においては削除されている。

こうした例から考察すると、スベトラーナ・アレクシエーヴィチは、戦禍の中で子どもとは言い難い経験をし、いわゆる「子ども時代」を失った彼らの嘆きが表された部分を初出から削除しているといえるだろう。では、これはなぜなのか—。

子ども時代を喪失した人びとの証言とは、換言すれば、彼らは子どもであっても大人の目を持ち、大人の目を通して見た世界や戦争の光景を語る。これに対し、著者はあくまでも子どもの目を通して見た戦争、子どもの感性が捉えた戦争を描くことに固執した。その結果、このような改訂を施す

ことになったのであろう。というのも、初出の副題は「子どもたちの話ではない本」¹⁵であった。つまり、当初は子ども時代を奪われた少年少女たちの声を届けようとした、ということがこの副題からも読み取れる。しかし、この後、副題は「子どもの声のための独唱曲」¹⁶と替えられた。ここには、子どもではない、つまり、大人の視点を持った子どもたちではなく、あくまでも「子ども」たちが「子どもの視点」で見た戦争を、証言を通して提示したかった意図が象徴的に表れている。その際、著者は、多くの証言を集めたこの証言集を「ソロ」つまり、「独唱曲」と表現した。では、合唱ではなく独唱としたのはなぜか。

著者は多分、多くの声が集まることによって一人一人の声が消えてしまうのではなく、あくまでも一人一人の独立した声の集積であることを示したかったのであろう。こうした方法について沼野充義氏は日本語翻訳版の「解説 小さな者たちが語り始める—トラウマとユートピア」の中で、「断片の集積こそが、戦争という苛酷で化け物の様に巨大な対象に対抗できる、人間的な唯一の手段であるかのようだ。これは戦争表象における、手法としての断片とでも呼ぶべきものではないだろうか。いや、これらの断片は、過酷な運命にさらされて砕け散ったユートピアの夢のかけらのようなものではなかったか。」と述べた上で、「これら様々な『ユートピアの声』は、統一された一つの『合唱』に溶け合うことはない。アレクシエーヴィチが後にこの作品の副題を『子供の声のための独唱曲』と変更したのも、おそらくそのためではないか、」という文化人類学者のセルゲイ・ウシャーキンの考えを紹介している¹⁷。この指摘の通り、統一を拒み、アレクシエーヴィチは子どもたちの各々の声を読者に届けようとした。

付言すれば、初出の序文全体は著作集では取り除かれ、「序文の代わりに」として、雑誌『民衆の友情』からの「大祖国戦争（1941～1945年）の時、ソビエトの子どもたち数百万人が亡くなった。ロシア人、ベラルーシ人、ウクライナ人、ユダヤ人、タタール人、ラトビア人、ジプシー、カザフ人、ウズベキ人、アルメニア人、タジク人、…」¹⁸という引用文と、「ロシアの古典の一つの質問」と

して、「いつかのドストエフスキーの質問。たった一人の子どもといえども、その子の苦しみを代償にして、私たちの幸せを、世界の永久の調和を求めてよいのだろうか。」¹⁹という言葉載せている。ここでは、著者の姿は極力消し去られ、極めて客観的な子供の死者の数の告知と、幸福についてのドストエフスキーの普遍的な問いかけに作者の想いを込めている。そこで読者は、証言を統括する著者の存在を完全に消去し、子どもたちの声そのものに耳を傾けることになる。

では、その子どもたちが語る、子どもの目見た戦争とはどのようなものであったのか――。

【Ⅱ】 子供たちの見た戦争

1. 戦争の色

スベトラーナ・アレクシエーヴィチが初めて単行本化した従軍女性兵士たちの証言集『戦争は女の顔をしていない』は、先にもふれたように、『最後の証人たち』と同じく独ソ戦が舞台であり、戦争の残虐な場面の証言が数多くあった。それは人間の五感を通して語られることが多く、中でも特徴的だったのは「音」の描写である。人の頭蓋骨が戦車によって砕かれていく音、生きながら家ごと焼かれていく人や動物たちの叫喚など。しかし、この『最後の証人たち』に特徴的なのは、子どもたちの戦争体験が「色彩」をもって語られていることであろう。

例えば、先に引用したミハイル・マイヨーロフ、5歳の場合、ドイツ人が家に侵入したのち、彼は「こわがること」しかできなかった。そして、家の前を焼け焦げた軍服を着た人が素足で両手を針金で縛られて連れていかれるが、それはなぜかまっ黒だったと覚えている。そして、「そのひとだけでなく、その頃のことはみんな黒色で覚えている。真っ黒な戦車が通ったこと。（中略）戦車を数えると、たくさんあって、雪が黒くなった。ぼくの体を包み込んでくれたのも黒いものだったし、僕は沼に隠れた。朝になって家に帰ると家はすでになくて、くすぶっている木片の山があるだけだ。」²⁰というように。ジェーニャ・セレーニャ、5歳の場合。12機か15機くらいの飛行機が轟音と共に近

づいてきたときのこと。「ただ一つ驚いたのはそれがみな黒かったこと、初めて見たファシストの飛行機は黒い飛行機として記憶された。」²¹とある。また、アーニャ・グレヴィチは孤児院にいた時の回想の中で次のように語っている。(枕を保母さんの言う通りに置かないと叱られる、という場面で)「そうでないところに置いたりすれば、保母さんたちに叱られました。ことに黒い背広を着たおじさんたちが来る時はそうでした。ドイツ側についた警察官だったのかドイツ人だったのかわかりません。記憶には黒い上下しか残っていないのです。(中略) 孤児院に来たドイツ人は黒い軍人外套を着ていたのです。もっとも、私たちの血液を採る時には、私たちは別の部屋に連れていかれて、その時は白い上っ張りでした。でも白い上っ張りは印象に残ってなくて黒い制服だけ覚えています。」²²というように、黒色のイメージはナチスドイツの軍服、大きな黒い戦車から生まれたものである。そして、それは焼け焦げた村、家、死体からのイメージでもあった。同じナチスドイツと戦った女性兵士たちの証言集『戦争は女の顔をしていない』の中には、このような「黒色」のイメージを語ったものは管見ではなかった。しかし、子どもたちは恐怖をもたらすものを視覚によって理解している。最も恐怖の対象であった、ドイツナチスの兵士たちの「黒色」を。

さらに、この強烈な「黒色」があるからこそ、それとは異なる色彩も脳裏に焼き付くのだろう。例えば、カーチャ・コロターエワ、14歳の「炭の上でその子たちの身体はピンク色に見えました。」²³には、町中が火の海となる中で、ある家の窓に飾られた火のような「サボテンの赤い花」(下線は論者、以下同じ)、なぜか燃えない窓辺の「白いカーテン」、草木が生えていた「黒色の土」はなくなりその後に見えた「黄色の砂」、「真っ黒」に焼け焦げた死体の中で、灰の上にあった「子どもたちのピンク色の死体」があった、というように多彩な色を印象的に語っている。また、上述のナチスドイツの飛行機の黒色を記憶したジェーニャ・セレーナ、5歳はお婆さんの「あいつらが兄さんの頭を割ったの。私は手でその脳をかき集めたの。気味が悪いほど白かった。」²⁴という言葉覚えていた。

そして、お婆さんの髪は一日で「真っ白」になり、その隣で泣いている母の頭をジェーニャはなでながら「お母さんも白くなくなってしまふ…」とつぶやく。このように、ドイツナチスを象徴する黒と、対象的に点在する鮮やかな色彩を通して子どもたちは戦争を語っている。

2. ナチスドイツの蛮行と「見る」こと

先に記したように、『戦争は女の顔をしていない』の女性兵士たちは前線にも赴き、狙撃に参加し、白兵戦も体験している。その戦闘場面の惨さは言うまでもないが、『最後の証人たち』の子どもたちの目から見たナチスドイツの蛮行の方が『戦争は女の顔をしていない』以上に読者に迫ってくるのではないか。その理由として考えられるのは、『戦争は女の顔をしていない』には、女性として戦争に参加することの肉体的な難しさや、消えない女性的感性、戦争に赴く前のこと、戦後の同性や異性からの差別や偏見なども証言されていて、戦争の場面そのものよりもそちらの方が強い印象を与えることがある。また、『最後の証人たち』は、子どもたちは虐待される側にあり、彼らは見つめるのみの存在で、彼らの目を通した光景のみが語られ、彼らが反撃にでることはないからだ。

例えば、ヴェーラ・ジェダン、14歳の証言。森の空き地に連れていかれ、スコップを渡された父と兄が穴を掘る様子を母と一緒に見ているように命じられる。最後に兄は「見ろ、ヴェーラ」と叫ぶ。そして、彼女は兄たちが射殺されるのを母と一諸に見た。その様子を次のように語る。「兄は穴に落ちないで、弾丸があたって前かがみになって、足を踏み出して、穴の側にすわりこみました。兄は穴の中に蹴落とされました。泥の中に。」²⁵そして、遺体を葬る時にもドイツ兵は泣くことを許さず、笑うことを強制する。笑っているのか、泣いているのか、覗き込んで確認までして。このように、ナチスドイツは、穴を掘らせ、その穴の淵に立たせて至近距離から撃ち、その穴に葬る銃殺を行った。また、恐怖心を植え付けて抵抗させないために、その様子を「見る」ことを家族や村人たちに強制した。そして、殺された人たちの周りをオートバイに乗ったまま皆の頭をすべてたたき割るまでその場を離れなかったという。このような銃殺

の証言は本著の中に何か所も出てくる。銃殺でなければ絞首刑である。ヴェーラ・ノヴィコワ、13歳は次のように語った²⁶。夫がパルチザン部隊の隊長である従妹はおなかに赤ちゃんがいたのに、首吊りの輪をかけられる。その時、従妹は長いおさげ髪を輪から引き抜いた。そして、馬を付けた櫓が滑り出し、その様子を見せられ泣きだした村人は子供でも容赦なく殺された。「今でも目をつぶるとそのおさげ髪が目浮かぶ……長い長いおさげ髪が」と。他にも犬をけしかけられ、体をずたずたにされ殺された子供など、残虐な殺戮は枚挙に暇がない。それを子どもたちは大きく目を見開き、みつめ、克明に記憶している。そして、細部にこだわり、まるでスローモーションの映像のように再現する。従妹が絞首刑される間際におさげ髪を縄から引き抜いたことを覚えていたように。そして、自分たちが「見る」存在であったことは、彼ら自身も無意識のうちに理解していたのではないか。ユーラ・カルポヴィチ、8歳は次のように証言している。

……僕は見た、僕たちの村を捕虜になった人びとの行列が追いつてられて行くのを。(中略)僕は見た、夜中にドイツの軍用列車が転覆したのを。朝には鉄道で働いていた人たちがみんなレールの上に寝かされてその上を機関車が走った……僕は見た、首輪の代わりに黄色い輪を首にかけた人びとが軽四輪馬車に繋がれて、馬の様にそれを引いていたのを。「ユダ！」と怒鳴られ、この人々が銃殺されたのを。僕は見た、母親の腕の中から子どもたちが銃剣でひたたくられ、火の中に放り込まれたのを……²⁷

「見る」ことしかできなかった彼らにとって、時を経てそれは癒しがたい記憶であり自分を責め続ける過去でもあった。しかし、この「見る」ことは彼らの唯一の存在証明であり、存在意義でもあったのではないだろうか。

戦時下の子どもたちの「見る」ことの意義は、アレーシ・アダモーヴィチ²⁸脚本によって制作された映画『炎628』²⁹にも通底している。アレーシ・アダモーヴィチはスベトラーナ・アレクシエーヴィチが証言を集めて文学にするという方法を学んだ

師と呼ぶべき存在だ。『炎628』の原題はИДИ И СМОТРИで「来たりて、見よ」という意味である。主人公の少年フリューラはパルチザンの活動に参加するが、家族を殺され、ある村では村人たちを集め火を放ち生きながら焼き殺すというナチスドイツの親衛隊アインザッツグルッペン³⁰の虐殺現場に遭遇する。少年は命を取り留めたが、すべてを見る。恐怖におののき跪いた少年の額に銃口を当て、アインザッツグルッペンの兵士たちは少年と共に写真を撮影する。恐ろしさのあまり一瞬で老人のように皺だらけになった少年の顔が印象的だ。この時の写真はナチスドイツの示威の象徴であると同時に、少年の見た光景を象徴するものでもあろう。まだ幼い少年はパルチザンとして十分な活動はできない。ただ、見、心に焼き付けるだけである。森の中でパルチザンの勇士がそろって記念撮影をする場面、ナチスドイツの蛮行の後の恐怖に満ちた写真撮影の場面は、「写真」という道具を用いながら、少年の見た戦争を象徴していると考えられる。そして、スベトラーナ・アレクシエーヴィチの『最後の証人たち』の子どもたちもまた、「見る」ことしかできない。

3. 戦禍の中で「人間」として生きる

このように、子どもたちの見た戦争は、「見る」ことに徹していた分、『戦争は女の顔をしていない』の女性兵士たちの戦争よりも苛酷で残虐なものであったかもしれない。しかし、また、幼いゆえに、その意味が分からず、現実がぼかされたり、また、幼い視点と苛酷な現実との落差から、微かなヒューモアを感じさせる場合もある。例えば、ヤーニャ・チェルニナ、12歳の場合³⁰。避難中の駅で家族を失い前線に向かう軍人が声をかけてきて、この母子の窮状に同情し、物資受け取り許可証を譲ると言ってくれた。しかし、少女はこの軍人が母親を好きになったと勘違いし、批難する。このように、子どもの目から見た世界は時に現実を捉えきれないこともある。また、インナ・レフケーヴィチ、10歳³¹は、市場で売るように預けられたケーキやボンボンを思わず口にしてしまい、少しずつ食べて、遂に売るのがなくなってしまった。幼い欲望は自分をおさえることができない。このような「子どもらしさ」がこの証言集に一抹のほほえまし

さをもたらしていることも事実だ。

ただ、スベトラーナ・アレクシエーヴィチが最も書きたかったのは、これまで抽出してきたナチスドイツの蛮行でも、子どものほほえまじさが苛酷な戦争を中和していることでもないだろう。それ以上に書きたかったことは人間の愛や連帯であり、時に敵味方を超えた人間愛ではなかったか。

例えば、ダヴィド・ゴールドベルグ、14歳は、空襲から逃れる際、汽車に子供が乗っていることを知り、女の人たちが駅で食べ物をくれたり、両親を亡くした乳飲み子のために自分のプラトック（肩掛け）を「オムツに使って」と差し出してくれたことを語る³²。ヴォロージャ・コルシュク、6歳は、避難する際に助けてくれた先生の「お金はいらない、辛い時には人間らしい同情や尊敬の気持ちはどんなお金のよりも得難い」という言葉が忘れられない³³。ゲーニャ・ザヴォイネル、7歳は、ユダヤ人ゲッターから救い出され、かくまわれていた。村人たちもこの農家がユダヤ人を匿っていた事を知っていたが決して密告はしなかった。勝利を迎え、赤軍兵士はこの少女を見つけ、自分の娘を救出してもらったかのように深く感謝したという³⁴。リーダ・ボゴジェリスカヤ、7歳は、子供を亡くしたおばさんが実の母親の様に何でも分け与えてくれ、全くの赤の他人なのに身内の様になったことや、兵隊さんが身体で必ず爆撃から守ってくれたことを語る³⁵。そして、他の証言からは、母親を銃殺された少女を引き取り、読み方を教え、お人形を作ったり、少女のための詩を作ったりしたパルチザンの話など、ソ連の国民が反ファシズムのために団結し、すべてが家族の様に心配し、かばい合い、共に戦ったことがわかる。それだけではない。ナチスドイツへの憎悪は消し難いが、敵味方を超えて「人間」として対峙しようとする人々の姿が点描される。ワーリャ・コジャノフスカヤ、11歳は同じ領地で働く年老いたドイツ人が生卵を飲ませてくれ、セルビア人に逃亡を助けてもらったことを語っている³⁶。タイーサ・ナスヴェトニコワ、7歳は、初めて隊列を組んで歩くドイツ人捕虜を見たが、人々が近寄ってパンをあげている姿に驚く。それを母親に問うと母は何も言わずに泣きだしたと語る³⁷。また、アーニャ・グルー

ビナ、12歳は、飢えた人を見ていることができず、ドイツ人捕虜にパンの切れ端を与える。ドイツ人はただ「ダンケ・シェーン」とお礼を繰り返していたという³⁸。また、息子を殺したかもしれないドイツ人捕虜に食料は渡さない、といいながら道を戻り、ジャガイモをあげた母親の話など、許すべきか、許さぬべきか迷い、複雑な想いを抱えながら、同じ人間として捕虜の身を案じ食料を与える姿が証言されている。

「聞き書きの成果をどのように提示するかはやはり、アレクシエーヴィチ独自の文学的手法にかかっている。それは単なる事実の集積でもなければ、テープレコーダ的な正確な再現でもない」³⁹という沼野充義氏の指摘もあるように、一つ一つの証言を集め「多声」として提示しつつも、証言を統括するアレクシエーヴィチの意識は問題にされるべきである。それこそが彼女の著作が歴史ではなく、文学であることを証明すると考えるからだ。こうした戦争を通して明らかになる人間の深さ、大きさをも著者は留めたかったのに相違ない。これは『戦争は女の顔をしていない』でも指摘できることであった。例えば、前線の退避壕の中に赤軍の女性兵士が運んだのは赤軍兵士とドイツ兵だった。赤軍兵士はドイツ兵への治療をののしるが、看護兵は同じ人間として負傷兵に手当てを施した。また、傷つき、死を目前にして横たわる敵同士の兵士の間にも、不思議な友情が何度も芽生えたことを女性兵士は証言している。この『最後の証人たち』においても、戦火の中の虐殺、死の恐怖、飢餓や困窮と共に、いわゆる「英雄」とはいえない一般市民たちの中に発露した「人間愛」の部分をつかみ上げさせたことによって、スベトラーナ・アレクシエーヴィチの著作が文学となり得たのではないか⁴⁰。この点を踏まえて、『最後の証人たち』というタイトルの持つ意味について考えたい。

【Ⅲ】「最後の証人たち」の意味

先にも記したように、日本語翻訳版の題名は『ボタン穴から見た戦争』である。訳者の三浦みどり氏は、ベラルーシの子どもたちの証言者の内、戦う体験をした者はほとんどないこと（または著者

が戦った者の証言は意識的に排除した可能性があること)、そして、彼らが「見ること」に徹するしかなかったことを十分に理解し、その結果、名付けた題名が小さな子どもの目を通して観た戦争の意を込めた『ボタン穴から見た戦争』だったと思われる。しかし、原著の初出の題名は『最後の証人たち』であり、これは2013年の著作集まで変わっていない。このタイトルは収録の最後に置かれた証言、ワーリャ・プリンスカヤ、12歳の「私たちが生き証人は終わりです」の最後の一節、「最初に亡くなったのは、私たちの素晴らしいお母さんでした。そのあと、私たちのお父さんがなくなりました。そして、私たちは判ったのです。すぐに感じ、理解したのです。私たちがあの境界線の、あの地域の最後の生き残りだと。今、私たちは話さなければなりません。最後の証人なのです。」⁴¹から発想されていることは想像に難くない。「最後の証人たち」とは単に生き残った者、または彼らが語る証言の数々、という意味があるだけではない。この言葉からは、こうした体験を経た者が語ることによって、二度とこのような体験が繰り返されないようにしなければならない、という使命感が読み取れる。「見ること」から「語ること」へ。ワーリャ・プリンスカヤは、見たことを「語ること」の先にこそ、子供たち、そして、私たちの地球が守られる、と考えていたのではないか。この想いは著者、スベトラーナ・アレクシエーヴィチの初出の序文の最後に置かれた次の言葉と重なる。

地上で一番素晴らしい人々は子どもたちです。不安に満ちた二十世紀に私たちは子どもたちをどのように守ったらよいのでしょうか？その心や生活をどのように守ったら？その彼らと一緒に、私たちの過去や未来を？

人々のこの惑星をどのように守ったらよいのでしょうか？女の子たちが自分の寝床で朝を迎え、おさげ髪がほどけたまま路上に横たわる死者とならないように。そして、子ども時代を二度と再び「戦争中」と呼ばないように⁴²。

こうした著者の想いを伝えるためには、翻訳でも『最後の証人たち』という題名は動かしがたいと考える。『ボタン穴から見た戦争』は、この著書の世

界をよく表してはいるものの、著者の想いからは遠くなってしまっているのではないだろうか。

【終わりに】

以上に付して考えたいのは原著の初めに置かれたジェーニャ・ベリケーヴィチ、6歳の証言⁴³についてである。この証言は日本語翻訳版では、「ただ、記憶の中で」の章の冒頭に置かれているが、初出と著作集では共に原著の冒頭に置いている。そして、初出では、証言の前と後ろの部分を大幅に省略している。しかし、著作集ではそれを補った上で本著作の冒頭に置いているのである。スベトラーナ・アレクシエーヴィチにおいて、冒頭の証言は末尾の証言と同じく大きな意味を持つ。チェルノブイリ原発事故の証言を集めた『チェルノブイリの祈り』でも、証言者は異なるものの、冒頭と末尾に「孤独な人間の声」という同じタイトルの証言を置いている。当時、人類未曾有の原発事故に遭遇した人々の事故の衝撃、愛する者を失う悲しみ、絶望、国家への不信が語られるが、それでもかすかな希望を信じて人は生きていくことを二つの証言が響き合って、読者に呼びかける形となっている⁴⁴。『最後の証人たち』も前述したように、末尾の証言から題名を採っていることから、冒頭の証言にも注意を払う必要があると思われる。

初出の冒頭は「彼は振り返るのを恐れていた」というタイトルの証言である。父と母の熱く長いキスの気配に目覚めたこの少女は、母を振り切って父が出征していくのを見る。子どもたちの呼びかけに、父は振り返るのが怖いのか頭を抱えて走り去る。そして、次に少女は母の倒れている姿を覚えていて、「お母さんを埋めないで」と泣き叫んだ。このような短い内容だが、著作集では、この前後に削除されていた部分を加筆している。それを翻訳すれば次のようだ。

私が思いだした最後の平和な生活は、夜、お母さんが読んでくれたお話—私の大好きな「金色のお魚」です。わたしはいつも金色のお魚に何か願っていました。「金色の魚よ、小さな金色の魚よ…」。そして、姉さんも願っていました。姉さんは別のことを願っていました。

「ひろはのこめすすきよ、希望が叶いますように」私たちは夏におばあちゃんのところに行くように、そして、お父さんが私たちと一緒に掛けてくれるように、願ったのです。お父さんはとても楽しい人なのです。

朝、恐ろしさから目を覚ましました。今までに知らない音がして…⁴⁵

そして、初出の部分に続く。お母さんが腕を広げて道に横たわっている部分の前には「黒い空」「黒い飛行機」という一文が挿入されている。そして、兵士たちがお母さんの遺体を埋める時「お母さんを埋めないで」という簡単なことばではなく、「私たちのお母さんを穴の中に埋めないで。お母さんは起きるの。そして私たちはもっと遠くに行くの」と語る。そして、その後、次の部分が付加されている。

砂の上を何か大きな甲虫が這っていた…お母さんが甲虫たちと一緒に地下に住むなんて…私は想像が出来なかった。どのように私たちは後でママを見つけ、どのように合うのだろうか？誰がお父さんに手紙を書いてくれるのだろうか？

兵士の一人が私に聞いた。「お嬢ちゃん、あなたの名前は？」私はすべて忘れていた。「お嬢ちゃん、あなたの苗字はなに？」私は判らなかった。私たちは夜までママの埋められた小さな丘の傍に座っていた。その間、私たちは死体を拾い集めたり、小さな丘に座ったりすることはしなかった。子供たちでいっぱい荷馬車だ。私たち以外はおじいさんが途中で集めた子供たちだった。別の村に着いた。別の人たちが農民の小屋にそれぞれ私たちを分けた。

私は長い間話さなかった。ただ、見ていた。後で思いだしたのは、夏。明るい夏。別の女の子の人が私の頭を撫でてくれた。私は泣き始めた。そして、話し始めた…お母さんについて、お父さんについて。どんなふうにお父さんが私たちから走り去っていったか、そして、振り返らなかったか…どんなふうにお母さんは横たわっていたか…どんなふうにも砂の上を甲虫が這っていたのか……

女の子の人が私の頭を撫でる。この時、私は彼女が私のお母さんに似ていることがわかったのだ⁴⁶。

この証言には多くの「最後の証人たち」が体験した「要素」が凝縮している。幸せな子ども時代から父親の出征と別れ、そして、母の死。母の死をもたらしたのは「黒い」空と「黒い」飛行機である。その母の遺体の傍らに這う甲虫。少女はその様子を凝視し、忘れることが出来ない。孤児として連れていかれた村で、少女は心を閉ざし言葉を発することなく、ただ見つめるだけだ。しかし、その果てに彼女は母親似の女性の優しい手に頭をなでられて、心の安らぎを得ることができ、これまで見て来たことを話し始めるのだ。

戦禍の記憶は子供の目で「見る」ことによって記憶されてきた。しかし、その記憶を、今こそ、語る時がきたのだ。「見る」ことから「語る」ことへ、冒頭のジェーニャ・ベリケーヴィチの証言の編集過程からはこの能動的な転換が読み取れる。そして、それは先に紹介した末尾のワーリャ・プリンスカヤ、12歳の証言と呼応する形をとっているのである。末尾の証言では、父と母が生きていた時には戦争の話はしなかった、ということが繰り返し語られている。しかし、父と母が亡くなり、最後の生き証人であることを自覚した時、彼女は決意する。「今、私たちは語らなければなりません。」と。

「見る」ことから「語る」ことへ、この『最後の証人たち』の初めと最後に置かれた証言を貫く想いは、スベトラーナ・アレクシエーヴィチの反戦平和への静かな決意とも重なるものであったはずだ。

【註】

- 1 スベトラーナ・アレクシエーヴィチは2015年、ノーベル文学賞を受賞したが、その受賞理由は「私たちの時代における苦難と勇気の記念碑と言える、多様な声からなる彼女の作品に対して」であった。(All Nobel Prize in Literature. The official web site of the Nobel Prize)
- 2 *Октябрь* (1985 №.3). Издательство Правда pp.3-87
- 3 Светлана Алексиевич. *Последние свидетели. Книга детских рассказов*. Молодая гвардия. Москва. 1985
- 4 Светлана Алексиевич. *У войны не женское лицо*. Мастацкая літаратура. Мінск. 1985
- 5 安元隆子「スベトラーナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』論」(『国際関係研究』日本大学国際関係学部国際関係研究所, 第37巻1号, 2017年)参照。
- 6 Светлана Алексиевич. *Последние свидетели. Соло для детского голоса. Время*. Москва. 2013
- 7 『ボタン穴から見た戦争 白ロシアの子どもたちの証言』(岩波書店, 2016年)
- 8 註2のp.81
- 9 註2のp.10
- 10 註2のp.74
- 11 註2のp.81
- 12 註2のp.66
- 13 註6のp.206
- 14 註2のp.18
- 15 *Книга детских рассказов*.
- 16 *Соло для детского голоса*
- 17 註6のpp.356-357
- 18 註6のp.5
- 19 註18と同じ
- 20 註2のp.11
- 21 註2のp.40
- 22 註2のpp.52-54
- 23 註2のpp.6-7
- 24 註21と同じ
- 25 註2のp.70
- 26 註6のpp.82-83
- 27 註2のp.68
- 28 1985年のソ連映画。監督はエレム・ゲルマノヴィチ・クリモフ。パルチザンの活動に参加する少年の目を通して観た独ソ戦や、ナチスドイツの親衛隊アインザッツグルッペン of 的蛮行を描いている。628は彼らによって白ロシアの村が消失した数を指す。
- 29 1927-1994。ベラルーシの作家。邦訳されたものとしては、『封鎖・飢餓・人間：一九四一～一九四四年のレニングラード』(新時代社, 1986年)など。
- 30 註2のpp.54-57
- 31 註2のp.12
- 32 註7のpp.94-95
- 33 註2のpp.8-10
- 34 註2のpp.34-35

- 35 註2のpp.13-15
- 36 註2のpp.64-66
- 37 註2のpp.8-10
- 38 註2のpp.775-76
- 39 註6のp.356
- 40 註5と同じ。
- 41 註2のp.87
- 42 註2のp.5
- 43 註2のpp.5-6, 註6のp.6-7
- 44 安元隆子「スベトラーナ・アレクシエーヴィチ『チェルノブイリの祈り』を読む—チェルノブイリ原発事故をめぐる言説—」(『国際文化表現研究』9号, 国際文化表現学会, 2014年)
- 45 註6のp.6
- 46 註6のp.7

【主要参考文献】

- *Октябрь* (1985 №.3) Издательство Правда pp.3-87
- Светлана Алексиевич. *Последние свидетели. Книга детских рассказов*. Молодая гвардия. Москва. 1985
- Светлана Алексиевич. *Мастацкая літаратура*. Мінск. 1985
- Светлана Алексиевич. *Последние свидетели. Соло для детского голоса. Время*. Москва. 2013
- Светлана Алексиевич. *У войны не женское лицо. Время*. Москва. 2013
- 『ボタン穴から見た戦争 白ロシアの子どもたちの証言』(岩波書店, 2016年)
- 『イワンの戦争 赤軍兵士の記録1939-45』キャサリン・メリデール, (白水社, 2012年)
- DVD『炎628』1985, (ソ連)
- ボゴロモフ「ぼくの村は戦場だった」(『新しいソビエトの文学2』所収, 1967, 勁草書房)
- DVD『ぼくの村は戦場だった』1962, (ソ連)